新交響楽団第93回演奏会

1981年9月19日(土) 7時
新宿文化センター



客演指揮　山　田　一　雄

Gustav Mahler (1860～1911)

グスタフ・マーラー

Symphonie Nr. 7 E-moll

交響曲第7番ホ短調

I. Langsam (Adagio)——Allegro risoluto, ma non troppo

第1楽章　ゆっくりと——決然としたアレグロで,余り速すぎぬ様に

Ⅱ. Nachtmusik; Allegro moderato

第2楽章　夜曲　アレグロ　モデラート

Ⅲ. Scherzo; Schattenhaft

第3楽章　スケルツォ　影のように

Ⅳ. Nachtmusik; Andante amoroso

第4楽章　夜曲　アンダンテ　愛情豊かに

Ⅴ. Rondo-Finale; Allegro ordinario

第5楽章　ロンド・フィナーレ　ふつうのアレグロで

楽器編成

1 Picc, 4Fl(2Picc)
3Ob, 1Engl.Hr,
1Kl in Es, 3Kl in A u B, 1Bass-kl,
3Fg, 1Kontra-fg,
1Tenorhorn in B,
4Hr, 3Tp,
3Pos, 1Tuba,
Pauken,
Gr-Trommel, Becken,
Trgl, Glsp, Tamburin,
Kl-Trommel, Rute,
Herdenglocken,
Tam-tam,
Tiefes Glockengeläute,
2Harfen,
Guitarre, Mandoline,
Streicher

使用楽譜　ヴィーン・マーラー協会版
(ボーテ・ウント・ボック社)

演奏時間　約80分

山田一雄

1912年　東京に生まれる。
1935年　東京音楽学校を首席で卒業。
初め、ピアニストとして活躍するが、作曲家としても成果を残す。指揮法をヨゼフ・ローゼンストックに師事した。
1940年　新交響楽団(現N響)の常任指揮者に迎えられ13年間にわたって日本のオーケストラに大きな足跡を残した。その間、ストラビンスキーの「春の祭典」、マーラーの交響曲第8番、ショスタコーヴィチの交響曲第5番、バッハの「ロ短調ミサ」、R.シュトラウスの「ドン・キホーテ」その他多数の本邦初演を手がけている。東京芸術大学教授、京都市交響楽団の芸術顧問、日本マーラー協会理事長と多くの役職にある。
日本の代表的指揮者のひとりであり、近年ますます円熟の度を加えた演奏は、強い迫真力と共に香り高い芸術を創り上げる。

新交響楽団

新交響楽団は1956年3月創立、主婦、学生及び様々な職業を持つ社会人から構成されている。

創立以来、音楽監督芥川也寸志の献身的な指導のもとに、ソビエト演奏旅行の他、九州・沖縄等の国内演奏旅行、ベートーベンチクルス、ストラビンスキー3部作一挙上演等を行った。

1976年には創立20周年記念として「日本の交響作品展」と名付けた2夜にわたる演奏会により、「芥川也寸志と新交響楽団」は第8回サントリー音楽賞を受賞。

INTERNATIONALE GUSTAV MAHLER GESELLSCHAFT

EHRENPRASIDENTEN: BRUNO WALTER †, ERWIN RATZ † - PRASIDENT: GOTTFRIED VON EINEM
SEKRETARIAT: WIEDNER GURTEL 6/2, A-1040 WIEN, AUSTRIA - TEL.: (0222) 65 08 355, 82 73 75

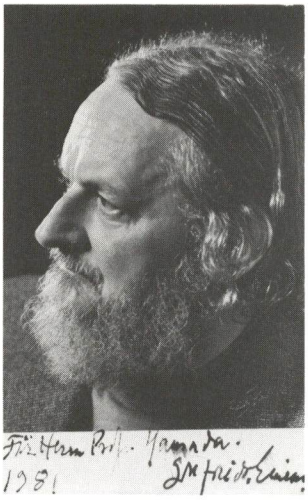
Wien, 6.Mai 1981

An das
S c h i n k y o Sinfonie Orchestra

Sehr geehrte Herren,

Mit großer Freude haben wir zur Kenntnis genommen, daß Ihre ambitionierte Konzertvereinigung die Werke Mahlers regelmäßig in ihr Programm aufgenommen hat. Das nehmen wir auch als Beweis, daß die Musik Mahlers in Japan bereits einen großen Freundeskreis umschließt, und das sicher nicht zuletzt dank Ihres Einsatzes für Mahler. Für die diesjährige Aufführung der VII.Symphonie in Tokyo unter der Leitung von Kazuo Yamada übermittle ich Ihnen im Namen der Gesellschaft sowie in meinem eigenen Namen unsere besten Wünsche.

Gottfried von Einem
Präsident



国際マーラー協会会長ゴットフリート・フォン・アイネム氏からのメッセージ

親愛なる新交響楽団の皆様

マーラーの作品を定期的にプログラムに取上げているという皆様方のような意欲的な演奏団体があることを知り、私共は大変に嬉しく思っております。そのことは日本において、マーラーの音楽が既に大きな愛好家の集まりを結成していることの証拠であるし、そしてそれは皆様方のマーラーへの傾倒のおかげに他なりません。今年は山田一雄氏の指揮で第七交響曲を東京でされるそうですが、国際マーラー協会と共に私個人も心から公演のご成功をお祈りいたしたいと思います。

解説　堀口大井

初演は1908年9月19日（プラハで）

その73年後の同じ日に、所も遠く離れた東京で、同じ曲が、戦後東京での各交響楽団の公演の中の六回目のものとして、今年創立25周年を迎えた新響により演奏されようとは、マーラーも予想さえしなかった事だろう。しかしこの偶然も、「やがて私の時代が来る」と確信していたマーラーは驚かないであろう。だが、没後70年の今年！、これらの接近した二つの数字は眼に痛い！、第八交響曲は完成し、「大地の歌」は書き始められていた。後はただ、第九交響曲と第十交響曲（未完）のみ！あゝ！

今は第七交響曲の事だけを、第七交響曲だけを考えていたいのに！

所で、規則的な練習と、個人的な研究と、そして綜合としての演奏会の積み重ねの上に絶えず向上しようと努力している新響は、山田一雄の指揮のもと、その情熱と指導の良ろしきを得た事もあって、一昨年の第五交響曲の、そして昨年の第六交響曲の充実した演奏の成就の後に、当然の事とは言え、避けては通れぬ第七交響曲に挑戦する。マーラーの意図を「忠実に実現しようとする」音楽家達に「神の御加護を！」

G・マーラー（1860～1911）の第七交響曲の、作曲者自身の指揮による、プラハ初演（1908年9月19日）と、ミュンヒェン初演（同年10月27日）とは、多くの人々の断片的な報告によると、激しい反対も熱狂的な讃美もなく、儀礼的な拍手による熱のない成功だったという。しかし、マーラーの作品の演奏会がいつもそうだったと言われている様に若い人達には熱烈な反響を呼び起こした。例えば、後に名指揮者となったヘルマン・シェルヒェンが、この演奏会で、新しい芸術に直面して圧倒的な感銘を受けた時は18才だった。そして、23才のベルク、クレンペラー、28才のイステル、31才のボダンツキー、32才のヴァルター、34才のシェーンベルクといった人達がプラハに集結し、機会を逃さず発表され年毎にその作品の演奏回数が確実に増えて来ているマーラーの今回の新作を、リハーサルの段階から見守った。クレンペラーもこの事について感動をこめて語り又書いているようであるが、彼はどの場合も、初演の年月を間違えたままで、その印象が本当に何時のもので、どうだったのか、やや真実性に欠けるのは残念だ。

初演の指揮のためにプラハに現われたマーラーは、一年前の、運命の急変をもたらした衝撃から立ち直った様だが写真では明らかに年令以上にやつれて見える。クレンペラーは「陽にやけて元気そうな」マーラーを描写しているのだが。

運命の急変は1907年夏

この初演に先立つ一年前の7月初め、マイヤニヒでの猩紅熱とジフテリアの併発による、最愛の長女マリア（5才）の急死、それをきっかけとして医者に発見され警告を受けた心臓の欠陥、そしてその年春から問題になって居り、9月末に決着した、ヴィーン宮廷歌劇場の総監督職辞任といった一連の出来事は、ギリシャ悲劇風に言えば、五年にわたる平和と幸福をねたんだ神がもたらした災厄とでも言うのだろうが、一時に襲いかかった感じのこれらの不幸の中にも、マーラーは、ニューヨークのメトロポリタン歌劇場と契約を交わし、その年の暮に、新世界へと旅立った。

そして1908年5月には、数々の立派な成功を収めた第一回のアメリカ旅行から、無事にヨーロッパに帰り、新しい別荘を南チロルのトープラッハに得て、再び夏の仕事を取戻す事が出来た。

アルマ・マーラーの回想録では「最も辛く最も惨めだった」この夏に、「老けて見え、具合が悪そうだった」マーラーは、やがて9月のプラハに現われた時には、クレンペラーによると、「約24回の下稽古をし」、「その度毎に總譜をホテルに持帰り、訂正し、推稿し、そして修正」するという「驚嘆すべき」「仕事の仕方」で、「すべてを一人でやってしまった」という。明らかに無理を承知でのマーラーの奮闘の一例だが、ともかく仕事への没入によってマーラーは健康状態も精神状態も良くなり、「リハーサルが進むにつれて自信も蘇った」と回想録に記されている。

第七交響曲について－(1)－

第七交響曲は1904年と1905年の夏に作曲され、1909年秋、ベルリンのボーテ・ウント・ボック社から出版された。

プラハ初演につづくミュンヒェン公演を含む演奏旅行を企画した興業師グートマン宛の手紙が、少なくとも6通の中4通残っていて、大変興味深い。このグートマンは2年後、第八交響曲を、「千人の交響曲」と名付けて歴史的な大公演をミュンヒェンで企画し、大成功を博した事で有名である。そのグートマンにマーラーが、繰返し要請しているのは、あらゆる点で第一級のオーケストラが必要という事であった。そして1908年7月付の手紙では、特に、第一ホルンと第一トランペットが真に優秀でなければならないと強調しているが、同時に、プラハ初演が成功だったら、その第七交響曲が、もしそうでなかったら、第五交響曲がいいのではないかと提案している。そして初演後の10月の手紙には、第七交響曲に決定したらしく（つまりマーラーは、プラハ初演を、成功とみなしたと思われ）必要な楽器編成が書いてあり、スコアの事、リハーサルの回数や仕方などの打合せの後、更に追伸として、もう一度、第一トランペット、第一ホルン、ティンパニストは真に第一級でなければならないと念を押している。これらの楽器が、いかにこの曲で重要なのかが良くわかる。

第七交響曲は五楽章からなっている。しかしこの五楽章は、よく比較に持出される、同数の楽章が長短様々な第五交響曲とは異なって、極めて対称的に構成され、大雑把に言えば、その所要時間は、第一楽章から順に、20分強、15分強、10分、15分弱、20分弱（全体として約80分）という時間配分になっている。勿論多少の伸び縮みはあって、クレンペラー指揮のニュー・フィルハーモニア管弦楽団の演奏のレコードのように、第一楽章に29分も（全体として約100分も）かけているのは別として、これは充分考えぬかれたと想像できる構造で、第五楽章の冒頭と終結部の最も特異な部分を除けば、これが音楽全体の内容に、制御された統一感を与える基礎となっている。その意味で、音楽全体の

時間的均斉にも拘らず、響きや、その印象が、調和を破っているかに思えるこの第五楽章の特異な部分については、実は、逆に却って、ここが音楽全体に、破格な美しさと偉大さを与えていると言えるのであって、この第七交響曲全体のみならず、ここ迄に至るマーラーの全世界を支配する最も重要な部分なので、後で詳しく述べる事にする。マーラーの音楽に忠実な演奏だけが、その困難を超えて行くだろう。

〈次に主題について〉

第一楽章の第一主題は、明らかに第六交響曲の第一楽章の第一主題と共通していて、しかも、以前ハンス・リヒターによって英雄と呼ばれたことのある、ブラームスの第三交響曲の第一主題と全く類似していて、堂々と力強いリズムのものである。マーラーは第六交響曲と同じように、第七交響曲においても、一人の英雄の主題として用いている。ただし、前者が悲劇的であるのに対して、後者はすでにあげたグートマン宛の手紙によれば、「圧倒的に、歓呼に溢れた性格」の、そして、ある出版業者には「比較的小規模な編成の、明朗快活な性格」の作品という事になる。多少惹句めいている所が面白い。確かに第七交響曲は、マンドリン、ギターが使われているので、楽器の種類は別とすれば、木管群、金管群共に第六交響曲より僅に少ない。
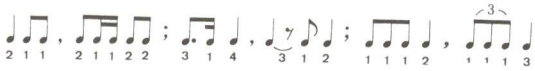
そしてこの英雄主題は、細かく分割され、種々なリズム、和声で彩られ、各楽章に主題として姿を現わし、楽章間の結びつきを緊密にしている。

一方、第二主題も、明らかに、第六交響曲の第二主題で、所謂アルマの主題と呼ばれるもので、これも英雄主題と同じように、細かく分割されて、滑らかに或は緻密に変奏されて、各楽章に、いわば寄り沿うような主題として現われ、楽章間を美しく結びつけている。

正にこの意味で、第七交響曲は、マーラーの家庭交響曲とも言うべきもので、第六交響曲が、R・シュトラウスの「英雄の生涯」の中の英雄像への批判に端を発していたように、R・シュトラウスの「家庭交響曲」への批判が込められている。音楽の中だけであったにしても、マーラーの無言の批判に、シュトラウスは敏感に反応したと思われる。「この頃から嘲笑的で辛辣になった」シュトラウス像が回想録に登場する。そしてそれを裏づける事実として、ひどく見当ちがいで滑稽な批判を残している。

〈そしてリズムについて〉

第一楽章の主題を作っている動機群の種々なリズムの中、全ての楽章に共通して用いられ、特に際立っているものから、幾つかを拾うと次の様なものがある。



など、これらはすでに述べた旋律又は旋律の分割されたものと立体的に組合わされて、主題の様々な性格を表現する為に使われている。

この様に見て行くと、各楽章は、旋律もリズムも共に、共通したものが用いられていて主題の結びつきの緊密さを示している事は明らかである。従って、第一・五楽章と、第二・三・四楽章とが、テーマ的にも様式的にも親近性をもたず、驚くべき予盾があると考えたレートリッヒもベッカーも、明白な統一性を見落し不当な解釈を導くという大きな誤りを犯した事になる。「中央の三つの楽章の夜曲の雰囲気」から一転して終楽章が明るくなったと感じられる事を、ベッカーもレートリッヒも、正しく説明できなかったのである。しかし、その突如とした変化が、破格な美しさと偉大さをもつ最も特異な部分として既に指摘した個所の真の狙いなのである。

第七交響曲について―(2)―

〈最も意義深い特異な様式について〉

先ず第五楽章の冒頭について

激しいティンパニーの導入のリズムは、すでに示したリズムの中の一つであって、バッハのクリスマス・オラトリオの冒頭と強い類似をもっているが、このリズムは、オラトリオの中の“歓呼せよ…”に対応して居り、バッハは他のいくつかのカンタータ等にも、普通言われている様な単なる転用又はパロディとしてではなく、全く同じ意味で使用して居り、マーラーは、それを同じ意味で、意図的に使用したものと思われる。マーラーは、この楽章に至って、自ら歓呼したい境地を発見したと言って良いのであり、それがこの第七交響曲の最大の眼目と言って良いのである。その境地とはどんな境地なのか。

次に特異な終結部(幻想的三部形式)について

上記の冒頭部の後半は、なお一層激しく始まる主要主題（ロンド主題）の提示も兼ねていて、それに続いて副次主題も現われ、ロンドが進行した後、四回目にコーダの如くロンド主題が、鐘と銅鑼が激しく鳴る中に、堂々と奏されるが、実はこれが、この第七交響曲全体の華やかで大きな終結部の始まりなのである。

この部分は第五楽章全体の三分の一にも当るので、単純なコーダとしては大きすぎ、主題も響きも、冒頭部と深く結びついているので、この終結部にこそ、この第七交響曲全体を閉じる結論的な意味が与えられているのである。その結論的意味とは何か。

以上二つの点を明らかにして始めて、マーラーが、第五楽章のロンドーフィナーレに、世の識者の予想外の破格の形式を持込んだ理由も、そしてそれを明瞭に表現するために、第五・第六交響曲で築いた大規模なポリフォニーの技術に加えて、一層高度な表現の目的を達成するために凝らした、旋律やリズムを細かい単位に分けて組合わせるという新しい工夫を重ねた理由も、一挙に明らかになる筈である。

それは、すべては、マーラー独特の人生観に由来するものである。第七交響曲は、英雄の悲劇的な死を追求した第六交響曲と異なって、自然の中で満ち足りた生活を送る家庭の幸福感が土台となっている。勿論そういう幸福の中にも死が訪れて、英雄を脅かす事は、「影のように」と題された第三楽章スケルツォで表現されている。

「影のように」の意味は三つあって、第一に「死」は人間に、丁度その影のように何時も付いていて離れないという意味であり、第二に、ユダヤ教では、死者は暗い死の谷を影のようにさ迷うという事から、救済

のない「死」の象徴として使われて居り、第三に、このスケルツォの調子が、第二交響曲（復活）の中の「聖アントニウスの魚説教」（1893年作曲の歌曲）の音楽を用いた第三楽章と類似している事から、同じように、ここでも、魂の救済という事を忘れた人間は、ただ「影のように」さ迷うだけだという比喩となっている。

これはマーラーがいつも心の中で反芻している自戒であるが、「第二交響曲」で得た精神的基盤によって、創造活動が第五・第六交響曲を経て第七交響曲の第四楽章迄進んだ時に、つまり、今その重要な特異性を述べようとしている第五楽章に取掛るに当って、正確に言うならば、前年に第二・四楽章を書き第一・三・五楽章を書こうとした1905年夏に、それ迄の論理的帰結として、しかし突如として、マーラーは、ゲーテの「ファウスト」第二部の終幕に思い至ったと思われる。それはファウストの魂が「永遠に女性的なもの」によって救済される、全幕の最も重要なしめくくりであり、ゲーテの精神の到達点というべき神秘的な場面である。これはやがて第八交響曲となって結実するが、それを1906年夏に「まるで書取りをさせられるように」作曲し始めたという事は良く知られている。上に述べた1905年夏に「ファウスト」に思い至ったという事の証明は、次の五つの事実の指摘で充分であろう。

第一に、「夏の作曲家」マーラーは、常に周到な計画を立てて作曲に取りかかった事。だから、1906年に第八交響曲の様な膨大なものを突然作曲し始める為には、マーラーの場合、忙しい指揮活動に集中しなければならない期間中は不可能で、どうしても前年の1905年の夏の休暇中に、たとえ一部分でも計画が前以て建てられていなければならない。これと全く同じ例が、少なくともすでに二回、佳人ナタリーによって、「少年鼓手」について、更に第五交響曲と切っても切り離せない「私はこの世から姿を消してしまった」について書き留められている。

第二に、夏のマイヤニヒの別荘の裏山の作曲小屋にはゲーテ全集とカント全集の他は、バッハの楽譜しか置いてなかったというアルマの記録。これらがどの様に使われたかは、第七交響曲が一番よく知っている。

第三に、1906年夏、第八交響曲は殆ど夏休みの二ケ月位の間に大部分が完成されたらしく、その8月末と思われる頃書いたメンゲルベルク宛の有名な手紙にはもう「私の第八は完了しました」とある。残された種々の記録類から考えて、第一部は6月半ばから7月半ばにかけて、第二部は8月始め頃迄には書かれたと思われ、その「超人的」な仕事ぶりをアルマは回想している。第一部の「来て下さい、創造の主である聖霊様」は中世の大司教フラバヌス・マウルスの聖歌だが、ゲーテもこれを研究していて、全集に含まれていた。この様な大規模な仕事は、いかにマーラーであっても、1905年夏の、研究と計画とがなければ無理である。

第四に、1906年夏、8月半ばにザルツブルク音楽祭で「フィガロの結婚」を二回指揮しているが、出発前に、第八交響曲全曲の締め括りに来る、「神秘の合唱」をアルマに弾いて歌って聞かせ、それを覚えてしまったアルマが旅先のマーラーへ和声づけをして送ったところ、マーラーがアルマの音楽的才能を繰返し激賞している手紙が残っている。ザルツブルクに現われたマーラーの上着のポケットからは一冊の手垢によごれたファウストが顔を出していたという。

第五に、第七交響曲が完成した筈の1905年夏の、残された手紙の中に、友人達に「私の第七は完了しました」といういつもならある筈の手紙がない事。これは極めて異例で、他の年に較べてこの年の手紙の数は異常に少なく、紛失してしまった事もあるかもしれないが、もしかすると、いや間違いなく、夏中に第七交響曲を仕上げてしまおうと頑張った為と、ゲーテ全集に没入した為とで、時間的に余裕がなくなってしまったに違いない。

回想録・手紙等の記述の中に散在する事実を拾い集めて、1905年の夏のマーラーの精神状況を追認したわけだが、それでは何故、以上述べた事が、マーラーをしてかくも歓呼させる事になったのか。それは、ここ迄来れば、非常に明白な事と思う。

即ち、すでに一言述べた第二交響曲で築き上げた精神的基盤が、第七交響曲完成への途上で、一層強固な新しく豊饒なものに変貌する機運を迎えたからに他ならない。

つまり、「死」に直面して、「突き刺す様な苦しみ」を恐れる事なく、「神のもとへ」光に向って飛立つ事が出来たマーラーは、今や、自ら羽ばたいて光の中を「漂って消えて行く」かわりに、聖母マリアの慈悲の中に、「永遠に女性的なもの」によって、すでに第六交響曲のフイナーレで暗示されていた様に、天国への階段を、導かれて光り輝く、一層の高みへと昇って行く事が出来るという至福の境地に至り得たからである。だからマーラーは、第八交響曲を、ゲーテの「ファウスト」の終幕を音楽化しただけのものと取られない様な数々の配慮をしたのだと思う。

音楽に即して言えば、自然の中に家族と共にある現世の幸福は、ロンド形式の部分で表現されて居り、その喜びに溢れた現世の家庭の幸福の中から天上へ昇って行く、祝福される英雄の姿は、先程から繰返しその特異性を強調して来た大きい終結部の中で、高音の金管の響きの美しさを最大限に利用して、この楽曲にマーラーが託した意図に従って余す所なく表現され、永遠の憧れを決定づけるかのような光り輝く英雄の姿で曲は閉じられる。

これが第二交響曲の完成以来再び、自らの高揚する魂を更に前進させるための據り所として新たに構築される筈の精神の基盤ともいうべきものであって、この確信が得られたからこそ、第八交響曲という未曽有の到達点に達する事が出来たと言ってよい。

この点に、交響曲の創造と共に発展して来たマーラーの、第七交響曲の、新しい存在の意義があり、第八交響曲の真の価値を見出す事が出来るのである。

第七交響曲について―(3)―楽章解説

多くの研究者等が屢々述べている事、例えばマーラー特有の線的対位法、或は、「四度の積重ね」つまり言わば水平と垂直の和音構造が四度になっているといった手法、更には、様々な不協和音を含めての和音の組

合せの実験、様々な演奏法の実験、新しい楽器の導入などについては、ここではふれないで、簡単に各楽章の説明に入ることにする。

第一楽章　序奏つきのソナタ形式

ラングザム(アダージョ)；アレグロ・リゾルート・マ・ノン・トロッポ

呼びかける様なテノール・ホルンにより、序奏は、ロ短調$\frac{4}{4}$拍子で、ゆるやかに，重いリズムと共に始まる。ここに第一・第二主題の要素も込められて居り、全曲のすべての主題が用意されていると考えられる。すぐリズムが変り、やや明るさを帯びた行進風の部分（これが後に提示部の結尾主題となる）を経過すると、このテノール・ホルンの主題は、徐々に第一主題（英雄主題）を形造り、次第に加速されると、ホルンとチェロによる力強い第一主題で始まるホ短調$\frac{2}{2}$拍子の主部に入る。

主部は第一主題の提示のあと、徐々に第二主題を形成してゆく部分を経て、ホルンの旋律を伴ったヴァイオリンに第二主題（アルマの主題）が提示される。展開部では、第一・第二主題は、夫々凡そこの順に、二度にわたって展開され、特に二回目は、トランペットの合図と荘重な和音進行に導かれて、ヴァイオリンの独奏に伴われたイングリッシュ・ホルンで第一主題が、またハープに伴われたヴァイオリンで、この上なく美しく嫋やかな第二主題が、奏される。ここは全曲中最も美しい部分と言えよう。この後、序奏と主部の大きな変奏を含んだ再現部に入るが、一瞬の間を置いて、第一主題が、ブラームスの第三交響曲の主題であるとすぐわかるような響きで現われる所は非常に印象的である。やがて第二主題も再現され、それにつづいて、小太鼓やタンブリンの激しいリズムで高潮してコーダに向う。最後は第一主題と第二主題とが混然とした壮大な華やかなホ長調の音楽となって、この楽章は閉じられる。

第二楽章　序奏つきの三部形式ハ長調$\frac{4}{4}$拍子

夜曲；アレグロ・モデラート

ホルンの呼応と木管の三連符とトレモロ、そしてオーケストラの半音階的な下降形とが印象的な序奏と、その中で用意された動機から作られた、二つのやや雰囲気の異なる、快くも長い行進曲風な部分を持つ第一部（ここではカウベルは遠くで鳴らされる）と、次に述べる中間部を挟んで、変奏されたそれの再現である第三部となり、ここではオーケストラの中で牛の鈴はのびやかに鳴らされる。中間部では美しいオーボエの歌がきかれ、中央に短く変奏された序奏の部分が再現し、再び木管と弦の独奏者達に、その旋律が現われると、三つの弱い銅鑼の響きに導かれて、フルートに神秘的な短い楽句が現われる。この中間部は非常に美しい。そして第三部の最後に変奏された序奏部が戻って、この楽章を閉じる。

第三楽章スケルツォ　ニ短調$\frac{4}{4}$拍子「影のように」

不気味な序奏部分の繰返しに挟まれて、「嘆いて」歌う部分と「陽気に」踊る様な部分が交互に現われる主部。ニ長調のオーボエの主題に始まり、激しい部分を経てホルンとチェロに主題が戻る主部の変奏であるトリオ。そして変奏された主部、トリオ風な部分と続き、ティンパニーがニ音の一打、ヴィオラがニ長調の和音をffで奏して終る。

第四楽章　三部形式ヘ長調$\frac{3}{4}$拍子

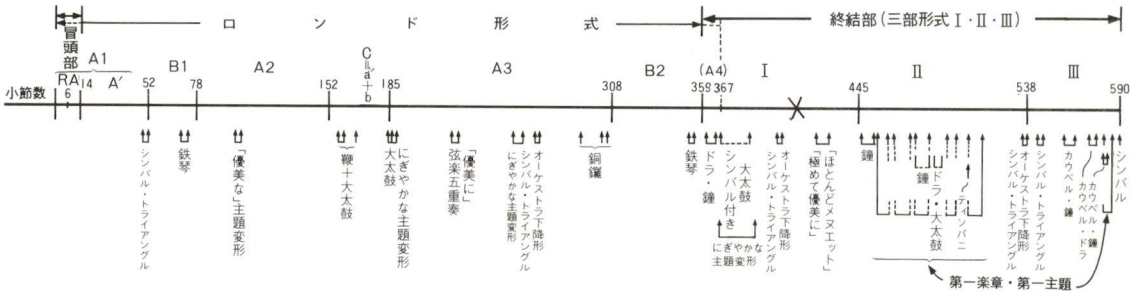
夜曲；アンダンテ・アモローゾ

あたかもアルマを思わせる様な美しいヴァイオリン独奏の主題で始まり、ギターやマンドリンそれにハープが加わって、細やかな愛情のこもった雰囲気とユーモアもこめられて曲は進み、大きく高潮した後、静まると、中間部に入る。ホルンとチェロの独奏で、気持ちの優しさを歌う様な主題が奏され、「非常に表情を豊かに」情熱的な変奏がつづき、美しい弦の和音とハープの分散和音に導かれて、オーボエで中間部主題が戻ると、続いて主部が再現する。あたかも平和な夜を思わす鳩の啼き声もきかれて、消え入る様に終る。

第五楽章　ロンドーフィナーレ　ハ長調　$\frac{4}{4}$拍子

アレグロ・オルディナリオ

既に述べた冒頭部は、ティンパニーの激しい独奏で始まる、リズムの際立った6小節の部分と、金管群を中心として、「厳かに」と指示されたポリフォニックな8小節の主要主題（ロンド主題A）の提示部から出来ている。この楽章で現われる旋律とリズムはすべてこの14小節に集約されている。直ちに主題は激しく行進曲風に変奏され高潮した後、急に静まると、オーボエから始まる「和やかに」と指示のあるロンド副主題（B1）が始まる。その後は図の様にロンドが進むが、三回あらわれる、ロンド主題を中心とする、Aの部分（A1、A2、A3）は、程度や意味の差異はあっても、各々その頂点に向って行く大きな起伏を持つ変奏となっている。ここには又、後で終結部に現われる時「殆どメヌエット」と指示される事になる「優美な」主題変形の生成と成長も含んでいる。副主題を中心とするBについては、二回目のB2は「のんびりと」の指示で、激しく高まった三回目のA3から急変して始まる。そして標準的なロンド形式からすれば、本来のコーダが来る筈の所へ、マーラーは、激しく鐘と銅鑼がなる中へ、金管で、重厚なカノン風に吹き鳴らされる主要主題(A4)を出現させた。ここが、先程から何度もその特異な様式の重要性について繰返し強調してきた終結部の始まりなのである。これは幻想的な三部形式と考えられる。この主要主題に続いてすぐすでに何回かきかれた印象的で賑やかな変奏が最も強く現われ、更に音楽は幻想的な静かな部分へ進む。続いて中間部(Ⅱ)は再び鐘と共に主要主題が金管に低弦の強奏を加えて現われ、直ちに第一楽章の第一主題（英雄主題）がメヌエット風主題の変奏等と共に繰返し奏され、転調によって変容を示し、遂にはそれが、ティンパニーのトレモロと共に木管と弦のメヌエット風主題が続く中を、「喜ばしげに」と指示された、高なるトランペットで、燦然と光りを放って輝くと、直ちに静まり、メヌエット風主題が残り、激しいオーケストラの下降形から第三部（Ⅲ）に入る。「いくらか荘重に」そして「華やかに」の指示で、冒頭のティンパニーのリズムと、激しいシンバルの確信と憧憬に満ちたffの連打と共に、主要主題が鳴り響いて冒頭部分A1が、カウベルや様々



な打楽器を加えて変奏され、激しく高潮した再現となる。

そして最後に、鋭い和音の交替と、カウベル・鐘の響きに支えられて、第一楽章の第一主題（英雄主題）がハ長調で現われて、英雄の浄化された姿を示す中に、シンバルの強い一打を加えて、全オーケストラが力強く短く奏するハ長調の主和音に達し、全曲を閉じる。

「私の第七が現われる迄…」

「可哀そうな私の交響曲」と書いたことのあるマーラーは、第六交響曲の初演後、十分に理解された受取り方をされなかったと感じたものの、既に完成している第七交響曲への自信と、既に胚胎している第八交響曲への期待から、「私の第七が現われる迄、第六は、ほんの一寸待たなければなりません」と批評家カルパトに書送ったが、これは第七交響曲が演奏されれば第六交響曲も受け入れられるだろうと考えたからであろう。この事は第六交響曲を作曲中の1904年に批評家シュペヒト宛の手紙で「私の最初の五つの交響曲を吸収し消化した世代だけが、解こうと希望するかもしれない謎を、私の第六は主張するでしょう」と書き、初演後メンゲルベルク宛には「私の第六は依然として固い胡桃らしい」と書いた事から考えて、マーラーは、第七交響曲では、上に述べて来た様々な新しい音楽的な試みとは別に、作品を理解し易くする何かある工夫をしたと考えて見る事も出来る。それが屢々パロディ、コラージュ、モンタージュなどと悪評を誘う原因となった自他作品からの豊富な引用なのではないか。マーラー自身は、何時もと同じように何一つ無駄なく意味のある引用を、親切にもわざわざそれと解る様に僅な変形を加えただけで、援用したつもりだったのに、現代音楽の手法の先取り等という見当ちがいばかりでなく、ただ賑やかだけの接続曲をかけばよかった軍楽隊長の音楽だ、と言ったクックの様な情無い批評まで出る事になった。「可哀そうな私の交響曲」！　言う迄もないが、これは第一・第二交響曲を正しく把握せず、従って上に述べた謎も解こうとしなかった事から生じたのは明らかである。この事はいくら強調してもし過ぎる事はない。観念的な用語を連ね同義反復を重ねただけで第七交響曲を第五・第六交響曲の哲学的止揚と誤って捉えたベッカーも、同じく、あゝでもないこうでもないと哲学用語と音楽用語を駆使して、けばけばしいだけのマーラー・アラベスクを画いただけのアドルノも、情報的価値の点では興味深いが、真のマーラー像に向っていない事だけは確実である。

マーラー個人の生き方や芸術に共感を持つ持たないに関係なく、その人間と作品とを好く好かないとに関係なく、確信に満ちた音楽の豊かな響きの永遠の高みが語っているものは、現代の音楽を反省するにも、新しい音楽を創造するにも、或は豊かな人間の魂の輝きが歌っているものは、これからの人間が、音楽を含め芸術の新たな創造を夢みて努力するにも、更に又諸学問に献身するにも、日常の瑣末な生活を流転するにも、世界の平和が掻き乱されて、生きて行く意味を疑わざるを得ない今日では一層、真実だけが、真実を求めた努力だけが、真に人間の魂に迄働きかけるものだけが、価値があるという事である。

（ほりぐち　おおい　物理学者・日本マーラー協会監事）

マーラー交響曲第8番「千人の交響曲」

日本フィルハーモニー交響楽団創立25周年記念演奏会

指揮／渡辺　暁雄
独唱／常森寿子、酒井美津子、勝本章子、木村宏子、
西明美、小林一男、勝部太、高橋大海
合唱／日本プロ合唱団連合
日本フィルハーモニー協会合唱団
ＮＨＫ放送児童合唱団
荒川少年少女合唱隊
9月22日（火）7時●東京文化会館（第335回定期）
23日（祝）2時●東京文化会館（特別演奏会）
A￥5000　B￥4000　C￥3000　D￥2500　中高生￥2000
日フィルサービス ℡03（234）5911～4

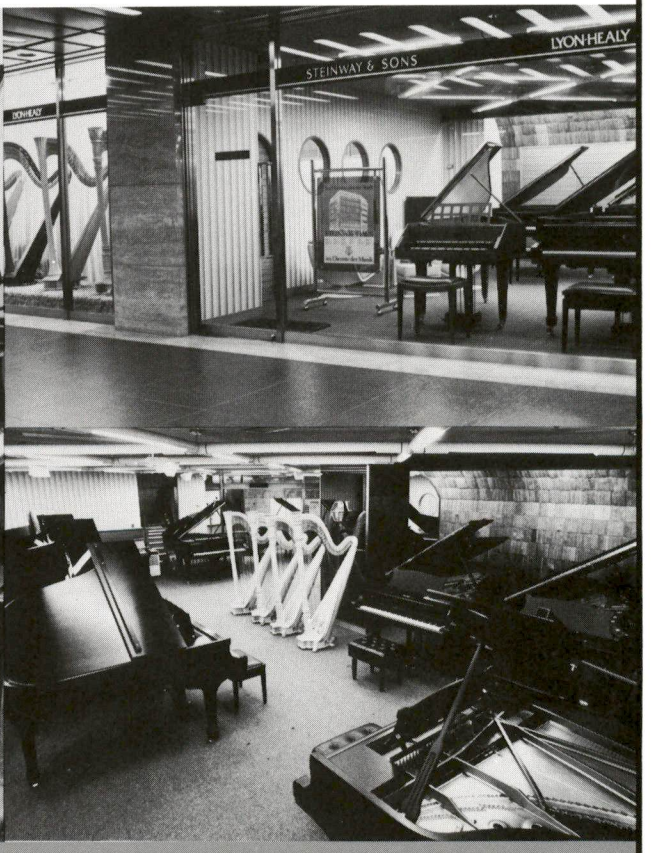
ウィーン、国際マーラー協会日本支部
日本マーラー協会
理事長　山田一雄
■ダスタフ・マーラー展
グスタフ・マーラーの自筆楽譜など127枚の貴重な写真を日本初公開します。
1981年11月4日～16日
場所　日本楽器池袋店
共催　日　本　楽　器
後援　オーストリア外務省
日本オーストリア大使館
■マーラー協会　入会申込受付中（本日ロビーにて）
一般会員　入会金　￥1,000
年間会費　￥3,000
〒182東京都調布市菊野台2-30-5　**日本マーラー協会**

STEINWAY & SONS

スタインウェイを選ぶ
それは、「妥協」との訣別。

繊細な音楽をあますことなく表現する
芸術家の感性、そこに妥協はありません。
内外の著名ピアニスト、全世界のコンサートホール、
そして録音スタジオが選んだ
スタインウェイ コンサート グランド ピアノ、
お確めください。貴方の指で、心で…。





弊社ショールームは数々の**スタインウェイ ピアノ**を心ゆくまでご試弾頂けるよう、最高のコンディションで常設するばかりでなく、**ノイペルト チェンバロ**、**ライオンヒーリー ハープ**、**小型パイプオルガン**等も取り揃え皆様のお越しを心よりお待ちしております。

※美しいカタログを用意しております。機種名をご記入の上、お申し込みください。

※お求めやすい長期(2～48回)ローンのお取り扱いをしております。ご利用ください。

日本総代理店 株式会社 松尾楽器商会

東京都港区芝大門1丁目9番1号(SKFビル) TEL.(436)4331㈹
国電：浜松町駅下車7分　地下鉄：大門駅(都営浅草線)　御成門駅(都営三田線)下車4分